

文殊菩薩の浄土經典

——藏訳〈文殊師利仏土厳浄経〉第一函の翻訳研究——

中御門 敬 教

【抄録】

「大宝積経」の中から、文殊菩薩の浄土經典である〈文殊師利仏土厳浄経〉を考察する。当経には不二法門、菩薩学処、仏国土の選択等々、種々の教説が織り込まれている。中でも注目すべきは、インド・チベット大乘菩薩行の一伝統である「大波濤行の伝統」の起点となる点である。この浄土經典を紹介することによって、壮大な文殊菩薩の誓願行とその世界を示したい。

キーワード：〈文殊師利仏土厳浄経〉、文殊菩薩、浄土經典

はじめに

大乘經典の精華ともいえる「大宝積経」の中から、文殊菩薩の浄土經典である藏訳〈文殊師利仏土厳浄経〉（以下、〈文殊仏国経〉）の翻訳研究を行う。当経は未翻訳であり、詳細な解題が存在しないため、その全体像の紹介を目的とする。そのさい内容理解のために私に小見出しを付けた。

現存する諸本は以下のとおりである。

- ・梵本：現存せず。シャーンティデーヴァ著〈集学論〉cp.1に逸文が存在⁽¹⁾。
- ・藏訳：北京版。大谷 No.760-15, dKon brtsegs, Wi.282 b 5-339 a 4, デルゲ版。東北 No.59, dKon brtsegs, Ga.248 b 1-297 a 3, 'Phags pa 'Jam dpal gyi sangs rgyas kyi zhing gi yon tan bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo
- ・漢訳：西晋竺法護訳『文殊師利仏土厳浄経』（『大正蔵』11, No.318）、唐実叉難陀訳『大宝積経』『文殊師利授記会』（『大正蔵』11, No.310-15）⁽²⁾、唐不空訳『大聖文殊師利菩薩仏利功德莊嚴経』（『大正蔵』11, No.319）

当経には不二法門、菩薩学処、仏国土の選択等々、種々の教説が織り込まれている。中でも文殊菩薩の前世者「普覆王（Skt. Ambararāja）」の誓願を教証とする、その誓願行が本経の肝心である⁽³⁾。この普覆王誓願は、インド・チベットの大乘菩薩行

の一伝統である「大波濤行の伝統」の起点にもなる。さらにその内容とする永続的な菩薩行は、例えば華嚴系統の普賢行や、浄土教系統の還相廻向にまで大きな影響を与えることになる。

さて今回扱う範囲は、全体四函のうち第一函である。チベット大蔵経の範囲では (P.Wi.282 b-296 a) (D.Ga.248 b-260 b) である⁽⁴⁾。北京版を底本としデルゲ版を適宜参照した。分量の関係から諸漢訳とを対照させた個々の事項研究や分析は、今後の課題とする。註記は内容補足を前提とし最低限にとどめた。実叉難陀訳と不空訳を主に参照した。

〈聖なる文殊の仏国土の功德莊嚴〉と名付けられた大乘經典

(P. Wi. 282 b) (D. Ga. 248 b) インド語で、『*Ārya-Mañjuśrī-buddha-kṣetra-guṇavyūhana*』⁽⁵⁾と名付けられた大乘經典。チベット語で、『*Phags pa 'Jam dpal gyi sangs rgyas kyi zhing gi yon tan bkod pa*』と名付けられた大乘經典。

序

第一函 あらゆる仏と菩薩とに帰命します。

このように私が聞いたある時に、世尊は〔マガタ国の首都〕ラージャグリハ（王舎城）にあるグリドラクータ（耆闍崛山）において、比丘千二百五十人の大きな比丘の僧伽（僧の集団）と、マイトレーヤ（弥勒）と、マンジュシュリー〔童子〕（文殊）と、除惡趣と、アヴァローキテーシュヴァラ（觀自在）と、マハースターマプラーブタ（大勢至）⁽⁶⁾等々の菩薩八万四千人、すなわち、誰もが無上の正等覺菩提から不退轉な者 (P.Wi.283 a) のみの者と共におられた。七十二コーティの天すべても大乘に正しく発趣した者たちであり、神々の王〔である〕シャクラ（帝釈天）と、サハー（娑婆）世界の主〔である〕ブラフマー（梵天）と、菩薩乘に正しく発趣した四万二千のブラフマーとも共におられた。すなわち、アシュラ王・毘摩質多羅（不空 Thags bzang ris）⁽⁷⁾と、アシュラ王・末利（不空 sTobs can）と、アシュラ王・驢肩（不空 Phrag rsub）⁽⁸⁾と、アシュラ王・歡喜（不空 Rab dga'）とであり、〔彼ら〕アシュラの四王すべても眷属の幾十万のアシュラが居るのと、共であった。龍王・難陀（dGa' bo）と、龍王・鄔波難陀（不空 Nye dga' bo）と、龍王・水天（不空 Chu lha）と、龍王・娑竭羅（実叉 rGya mtsho）と、龍王・摩那斯（不空 gZi can）と、龍王・高勝／最勝

(実又 gZhan gyis mi thub pa) と、龍王・地持 (不空 Sa 'dzin) と、龍王・無熱惱 (不空 Ma dros pa) と、龍王・蘇迷蘆 (不空 Ri bo pa) と、龍王・伏魔 (不空 bDud las rgyal ba) と、龍王・月上 (不空 Zla ba'i bla ma) 等々、(D.Ga.249 a) 龍王六万二千である。すなわち、大王・持国 (不空 Yul 'khor srung) と、大王・増長 (不空 'Phags skyes po) と、大王・広目 (不空 Mig mi bzang) と、大王・多聞 (不空 rNam thos kyi bu) とであり、〔彼ら〕すべての四大王も眷属の幾十万の者を伴っていた。ヤクシャ (夜叉) である金毘羅 (不空 Kum bhi ra) と、阿吨唎俱 (不空 'Brog gnas) と、針毛 (不空 Khab spu) と、妙意 (実又 Yid bzangs) と、妙慧 (不空 Blo gros bzang po) と、妙相 (実又 dByibs bzangs) と、普色 (実又 Kun nas kha dog) と、不動ヤクシャ (不空 Mi 'khrugs pa) であり、彼らと他のヤクシャ十万とも共であった。

またその時、世尊はラージャグリハの大城の近くに⁽⁹⁾安住し、坐っておられた。天と、龍と、ヤクシャと、ガンダルヴァ (乾闥婆) と、アシュラ (阿修羅) と、ガルダ (迦楼羅) と、キンナラ (緊那羅) と、マホーラガ (摩睺羅迦) と、〔以上〕人と〔上記の〕人ならざる者たちと、四衆 (比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷) らが恭敬し、上師とし、(P.Wi.283 b) 服侍してから、供養し、申し上げた―

「世尊よ、〔飯、粥などの硬い〕主食 (bza'ba) と、〔野菜、果実などの軟らかい〕副食 (bca'ba) と、〔油などの〕調味料 (myang pa) と、衣服と、御供物 (zhal zas) と、臥具と、病気の医薬と、多くの優れた資具を受けてください。」と。

世尊への供養

またその時、世尊は午前の時、内衣 (sham thabs) と法衣とを召されて、鉢を持ち、比丘の大僧伽とともに、十万コーティ・ナユタの神によって囲まれて、列の先頭に立たれた。仏の大威力と、仏の大遊戯と、仏の大神変と、仏の大神力とが、ウトゥパラ華 (青蓮華) と、クムダ華 (黄蓮華)、プンダーリカ華 (白蓮華) の大雨を降らし、十万の音楽を演奏してから、〔仏は〕ラージャグリハの大城のアジャータシャトル王 (阿闍世王) の宮殿に乞食のために行かれた。十万コーティ・ナユタの光明をも放った。それから、その時、世尊は造作なさったとおりの神力を造作なさったことによって、御足を置いた〔ところの〕そこかしこには、車輪ほどの蓮華― 花卉は金、茎は銀、花蕊は毘瑠璃、台は^{うてな}良い宝を持ったもの―(D.Ga.249 b) が生じた。それら蓮華の中央の台には、菩薩の姿の結跏趺坐した者たちが生じた。そのような神力を造作なさり、現前になされた。それから、彼ら菩薩の姿の者たちは蓮華を具え、ラージャグリハの大城を七回まわり、これらの偈頌を述べた―

菩薩による供養の勧め

「人々を利益なさる船主であり、諸善をお作りになる功德処（福田）であり、シャーキャ（釈迦）〔族〕の衆中尊〔である〕知性と寂静の大いなる者、その世間の依怙主は都城へ行かれた（P.Wi.284 a）。(1)

天の住所（境地）に住まうことと、同様に老と死からの解脱を望む者、そして魔の軍勢を破ることを望む者、彼はシャーキャ〔族の〕獅子を供養しなさい。(2)

衆生たちを利益し慈しむためにコーティ劫において修行を行う、諸々の「ムニ（牟尼）」という言葉も得難い、その牟尼は、今日、ラージャグリハへ行くことを望まれる。(3)

食物と飲み物（zas skom）、同様に衣服と、乗り物と、息子と娘、妻たちと、無量不可思議の布施を施した、かの一切智者はラージャグリハに行かれる。(4)

〔その者は〕手、足、眼、耳と、鼻と、すぐれた〔諸〕支分、頭を捨てた。全てを捨てた〔ことによる〕功德を具えた、施しできる（gtong phod pa）彼は、最高の一切智者の智慧を獲得した。(5)

布施と、律と、律儀とについて学び、最上士の損なわれない戒、忍の本体〔である〕最高の功德を具え、寂静のその御心〔の者〕は、今日、都城に行かれる⁽¹⁰⁾。(6)

苦〔海〕に沈んだ世間をよく御覧になって、最高の精進をコーティ劫にわたって行い、無比であり無辺の禪定を具え、その梵音は、今日、都城に行かれる。(7)

その大仙の智慧は、無等であり、虚空の辺際のように無量である。その善逝の他の功德もまた、行と異熟により浄められた。(8)

知を具えたことによって、魔の軍勢を摧破し、不動の境地〔である〕涅槃を獲得し、法輪を如理に転じた、(D.Ga.250 a) その法の自在者は、都城に行かれた。(9)

すぐれた三十二相によって莊嚴された身、善逝となるよう願う者たちは、心臓(snying)に円満な菩提心⁽¹¹⁾を置いて、彼のほうへ供養のために行きなさい。(10)

貪・瞋・痴を断って、同様に他の煩惱から勝利したいと願う、その者は教主のほうに近づき、(P.Wi.284 b) 速やかに、多くの種類の無辺の供養を行いなさい。(11)

ブラフマンと、天の自在者 (lha'i dbang phyug)⁽¹²⁾と、シャクラ（帝釈天）を得たいと、願い、天の安楽によって常に遊戯歓喜する〔のを願う〕その者は、牟尼を供養するために近づきなさい。(12)

〔娑婆世界の〕四大洲の主・王となり、最高の七宝⁽¹³⁾を自ら獲得し、最高の千子を願う者、その者は最高の衆生（仏）を供養しなさい。(13)

長者、商主 (tshong dpong)⁽¹⁴⁾、国の王 (khams kyi rgyal po)⁽¹⁵⁾と、美しい姿と、

優れた従者・眷属と、資財が増大する最高のものを願う者、その者はそこに行き、牟尼を供養しなさい。(14)

すでに解脱した者、そして解脱する者すべては、牟尼たちの最高の法を聞いてから〔である〕。導師たちの声もここでは希である。ゆえに聞法に、ここに速く駆けつけなさい。(15)』と。

世尊の眷属となる

それからラージャグリハの大都城の、多くの十万コーティ・ナユタの生きものを、それらの偈頌が促した。男、女、童兒、童女たちは、華と、薫香と、花鬘と、塗香と、抹香袋を持ち、金と銀の華の袋を持ち、傘と、^{のほり}幢と、^{はた}幡を持ち、太鼓と、螺貝(dung)、小鼓と、銅鑼と、一絃琵琶(bi bang rgyud gcig pa)と、多絃琵琶と、管楽器と、手鈴('khar dkrol)と、キムバラ(楽器名 kim pa la)と、ナクラ(楽器名 na ku la)と、琵琶を持って、如来を作意し、如来を思念し、仏に相応した作意をなしたことによって歓喜と、最上の歓喜とを得て、眷属となった。

世尊の功德 (神変の示現)⁽¹⁶⁾

それから、世尊はラージャグリハの大都城に行かれた。(D.Ga.250 b) 世尊の右の御足を門の敷居に置くやいなや、それから、すべての都城〔域〕は六種に振動した⁽¹⁷⁾。天と人の十万の楽器も(P.Wi.285 a) 演奏せずに音が生じた。天の華の雨も降った。盲目の衆生たちは眼で諸物を見た。聾の衆生たちは耳で音を聞いた。狂乱の衆生たちは憶念を得た。意が散った衆生たちは〔專注した〕一境を得た。裸の衆生たちは衣服を得た。飢えた衆生たちは食を得た。貧しい衆生たちは財を得た。その時に、いかなる衆生も貪による逼迫がなかった、瞋による〔逼迫が〕なかった、痴による〔逼迫が〕なかった、嫉による〔逼迫が〕なかった、^{ものおしみ}慳による〔逼迫が〕なかった、怒りによる〔逼迫が〕なかった、慢による〔逼迫が〕なかった。その時にありとあらゆる衆生も、慈の心と利益の心とを具え、〔長い輪廻において〕互いを父母として想うようになった。そこでこのように言うべきである――

「仏・士夫たる大獅子、十力〔者〕が都城に行かれた時、その瞬間に人たちは、無垢の広大な安楽を得た。(1)

盲目の者の諸眼は見えた。聾の者は聞く力も生じ、狂乱した者たちは憶念を得たし、意の散った者は一境を同様に〔得た〕。(2)

裸の者たちは衣服を得たし、飢えた者たちは食を得た。貧しい人も、歓喜して、諸

財を得た。(3)

多くのコーティの諸天も、虚空にとどまり、〔十〕力〔者〕を供養し、論者の獅子を供養するために、華の大雨をも降らした。(4)

鼓と小鼓、鏡鉢 (sil snyan)、螺貝、楽しくさせる無量のものは、仏の福德によって、入城するとき音も生ずる。(5)

都城を遍く振動させ、その時、楽しさが等しくとどまり、人はこの驚異を見て、たいそう広大な歓喜を得た。(6)

貪により逼迫されないし、その時、怒り、愚かさ、慳〔による逼迫〕がない。慢等々の (P.Wi.285 b) 罪過によっても逼迫は、その時、(D.Ga.251 a) 余りなくなかった。(7)

歓喜が遍満し、澄浄であり、人々は〔互いを〕母だと想った。仏・十力〔者〕が、人 (skye bo) の安楽のために都城に来られた時、(8)

人ならざる者 (mi yi ma yin) の諸楽器も、演奏せずに音がまた生じ、アシュラ、天、人を伴った世間は、善逝の光が広く満ちた。(9)

そのように、仏が衆生を益するために都城に行かれた、その時、驚異の希有なることが〔生じ〕、多種のことが大いにあった。(10)」と。

世尊と商主摧過咎

それから世尊はラージャグリハの大都城に行った。商主 (tshong dpong)、大サーラ樹 (shing sa la chen po) のような者の子〔である〕、摧過咎⁽¹⁸⁾ (Tib.sDig bcom, 罪過を摧破した者) という者、在家者の菩薩が町⁽¹⁹⁾のあるところに居た。摧過咎菩薩は、世尊、〔すなわち〕美しく、喜ばしくなり、根が寂靜であり、心が寂靜であり、調伏と止住を獲得し、最高の彼岸に到り、調御し、〔調教された〕象のように根が柔順で、湖のように澄浄で濁りがなく⁽²⁰⁾、明瞭であり、大士の三十二相を具え、八十随好により良く身を莊嚴し、顔色が善く、最高の広大さを具えた者が、遠くから来られるのを見た。見てから、さらに彼は世尊に対して、心がたいそう浄らかになった。彼は心がたいそう浄らかになって世尊のその場所に行き、到着した。そして、世尊の御足に頭でもって礼拝した。世尊に対して三回〔右まわりに〕圍繞して、一方に坐した。一方に坐してから、摧過咎菩薩は、世尊の〔居られる〕その場所の傍らで合掌して、拜んで、世尊に対して、このように申し上げる - (P.Wi.286 a)

「世尊よ、菩薩摩訶薩がいくらの法を具えたならば、速やかに無上の正等覺を現等覺し、仏国土も浄化し⁽²¹⁾、求めるとおりの仏国土の功德莊嚴、そのとおりのものも

撰受するでしょうか。」と。

成仏への法— 菩薩が具えるべき一法

それから世尊は、(D.Ga.251 b) 摧過咎菩薩への慈愍と、大衆を教化するために、都城の一方に居られた。〔摧過咎菩薩は〕一方に居られて世尊が見えてから、多くの十万の衆生たちも来た。天空からも⁽²²⁾多くの十万コーティ・ナユタの天たちが恭敬をもち、敬語 (P. zhe sa) を具え合掌した。世尊に対して礼拝してから坐った。それから世尊は、摧過咎菩薩摩訶薩に宣べられた—

「良家の子よ、菩薩摩訶薩は、一法を具えるならば、速やかに無上の正等覚を現等覚し、仏国土も浄化し、欲すとおりの仏国土の功德莊嚴、そのとおりのものも撰受する⁽²³⁾。一法は何かといえば、良家の子よ、これについて菩薩摩訶薩は一切衆生を^{あわれ}悲み、増上意樂によって、無上の正等覚に発心する。そのうち「増上意樂」を了解すべきことは何かといえば、良家の子よ、「増上意樂」というものは、およそ菩提のために心を発してから、どんな不善の業も行わないことである。何を「行わない」のかといえば、貪を行わない、瞋を行わない、痴を行わない、在家のしるし (khyim pa'i rtags) に渴愛を行わない〔ことである〕。(P.Wi.286 b) 出家してからも利得 (myed pa) と、敬重 (bkur stir) と、名声を望まず、出家者の修行、それに住するのである。そのうち、「出家者の修行」とは何かといえば、すなわち、一切法を正しく如実に証得することである。「一切法を正しく如実に証得すること」とは何かといえば、良家の子よ、「一切法」というものは、蘊と、界と、処と、有為と、無為との諸法である⁽²⁴⁾。五蘊を証得することはどのように「証得」するのかといえば、五蘊を幻術のようなものと、空寂であるのと、空であるのと、無認得と、生じていないのと、滅していないこと (D.Ga.252 a) として証得することである。「どのように証得すること」も、正しくは見ないことと、そのように証得することである。〔いつか〕正しく見ず、知らず、慢心 (rlom sems) せず、尋思せず、分別しないその時、あらゆる分別が寂滅することを、「五蘊を〔如実に〕証得すること」という。およそ「五蘊を〔如実に〕証得する者」は、一切法を「〔如実に〕証得すること」⁽²⁵⁾。良家の子よ、これを「出家者の修行」という。そのように発趣した「菩薩摩訶薩」は、衆生たちを捨てない。それはどうしてかといえば、彼は、自己がそれらの法を遍知したとおりに、そのとおりに一切衆生に教示しても、衆生と法をも認得しない。良家の子よ、菩薩摩訶薩はこの一法を具えれば、速やかに無上の正等覚を現等覚し、仏国土を浄化し、望むとおりの仏国土の功德莊嚴、そのとおりのものも撰受する。」⁽²⁶⁾と。

摧過咎菩薩と無生法忍

世尊が仏国土の功德莊嚴、円満に成就する〔という〕この法門を説明した時、摧過咎菩薩は無生法忍を得た。(P.Wi.287 a) 彼は歓喜し、最上に歓喜し、それによって七ターラ樹の高さほどに空間に上昇した (*phags so)。その眷属の中からは、二千の生きものたちは無上の正等覚に対して発心した。天と人を伴った一万四千の衆生〔たる〕生きものは、諸法に対する法眼が塵なく、垢を離れ、清浄となった。それから世尊はその時、微笑をなさった。これは仏・世尊たちがいつの時、微笑をなさるのかの法性である⁽²⁷⁾。その時、世尊のお口から、多くの色、種々の色の光明が放射する。すなわち、青と、黄と、赤と、白と、紅と、水晶と、銀色のようなものが生じた。それらが (D.Ga.252 b) 無量、無辺の〔諸々の〕世界を照らすことで遍満して、再び戻った。〔その光は〕世尊を三回圍繞して、世尊の頭頂に没した⁽²⁸⁾。

世尊とアーナンダー 摧過咎菩薩の成仏

それから具寿アーナンダは、座から立ち上がり、〔僧侶の三衣⁽²⁹⁾のうち〕上衣を一方の肩にかけた。右膝の膝頭を地につけてから、世尊の〔居られる〕その場所の傍らで合掌して、拝んで、世尊に対して、これらの偈頌を申し上げる－

「一切諸法に自在であり、彼岸に到った、導師〔である〕あなたは、王者の力をお持ちです。あなたは一切知者として世間に知られている。何のために微笑し、これを示したのかを、お説きください。(1)

偉大な牟尼は、過去の一切がお分かりになり、同様に未来の一切もお分かりになり、現在も知っておられて、呵責されない。何のために微笑し、これを示したのかを、お説きください。(2)

上中下の心を具えた、一切衆生の行いを知り、離貪し、有(生存)の想いの彼岸に到った、教化(調伏)されていない者の調御者よ、授記してください。(3)

コーティ・ナユタの諸天すべてが来たり、(P.Wi.287 b) 過失ない者に合掌し、拝み、これら法行者すべてが坐して、偉大な牟尼・無等の者よ、お言葉を発してください。(4)

あなたは智慧が彼岸に到りました。あなたには迷乱がございません。個別の行すべてを知っておられます。何のために微笑を示したのですか。(5)

これら千のコーティ・ナユタの天が、諸法を求めるためにここに来たりました。同様に比丘の集団も多く、諸々の妙法を聞くことを求めています。(6)

あなたを供養するために、きわめて多くの諸々の樂器 (sil snyan rnams) を良く響

かし、大勢の者は〔鼓を〕打ちます。疑をなす多くの者たちすべては、求めていません。牟尼よ、今日、ここで疑を速やかに断つようお願いします。(7)」と。

上空への飛昇、アクションブヤ如来

そのように〔アーナンダは〕申し上げる。世尊は具寿アーナンダにこのように宣べられた—

「アーナンダよ、この摧過咎菩薩摩訶薩が、七ターラ樹の高さほどの上空に居るのが見えますか。」と。

アーナンダは申し上げる—(D.Ga.253 a)

「世尊よ、見えます。善逝よ、見えます。」と。

世尊が仰った—

「アーナンダよ、この摧過咎菩薩摩訶薩は六百二十万の無数の劫をへて、無上の正等覚を現等覚するであろう。無熱病〔という〕劫 (bskal pa rims nad med pa) において、この三千大千世界〔自体〕において、如来・応供・正等覚者〔である〕寂靜調伏自在 (Tib.Rab tu zhi zhing dul ba'i dbang phyug)⁽³⁰⁾ という者として、世間に生ずるであろう。アーナンダよ、譬えば現在のアクションブヤ (阿闍/不動) 如来のアビラティ (妙喜) 世界における仏国土の功德莊嚴と、声聞の円満と、菩薩の円満と同じく、かの世尊・如来・応供・(P.Wi.288 a) 正等覚者〔である〕寂靜調伏自在の仏国土においても、それ (アビラティ世界) より勝らず、劣らないであろう。」と。

世尊とアジャータシャトル

こう仰ってから、世尊はその方向から来られ、次第にアジャータシャトル王の宮殿のその場所に来られて、着かれた。そして、世尊は準備された座に坐った。比丘の僧伽も適宜、座に坐った。それからアジャータシャトル王は、世尊と比丘の僧伽とが居られると分かって、自ら手をさし出して、〔飯、粥などの硬い〕主食 (bza'ba) と、〔野菜、果実などの軟らかい〕副食 (bca'ba) と、〔油などの〕美味な多くの調味料 (myang pa) とをもって、如来と比丘の僧伽とに給仕し、満足させた。給仕して、満足させてから、如来は食事を召し上がり、鉢を置き、御手をひっこめた⁽³¹⁾と知って、〔王は〕世尊に対して、一組 (双 zung) の値段のつけられない〔ほど高価な〕衣を御身に〔着せて〕さし上げた。御身にさし上げてから、さらに世尊と比丘の僧伽に礼拝した。一つの宝座 (stan rin pa zhig) を立ち上がって、(D.Ga.253 b) 一方に坐った⁽³²⁾。一方に坐ってからアジャータシャトル王は、世尊に対して、このように申し

上げるー

煩惱や無知の滅

「世尊よ、害心と、忿怒と、瞋と、覆（隠蔽）は何から生ずるのですか。無知は何から生ずるのですか。無知はどのように滅するのですか。」

煩惱や無知の起源と滅

〔王が〕 そのように申し上げると、世尊はアジャータシャトル王にこう宣べられたー

「大王よ、我執（ngar 'dzin pa）と我所（nga yir 'dzin pa）とが有ることより、害心と、忿怒と、瞋と、覆とは生ずることになる。我執と我所とに住するので、功德と過失とを知らない、したがって無知という。およそ我執と、（P.Wi.288 b）我所執それを、正しく如実に遍知するもの⁽³³⁾、それについて、「知ること（shes pa）」または「知らないこと（mi shes pa）」といて、仮設できない。したがって、大王よ、あなたは一切の行（'du byed）について、どこにも去ることと、どこからも来ることを仮設しない、そのように学ぶべきである。大王よ、「およそどこにも去らない、どこからも来ない」、それについて、どんな法も去ること、または来ることはない。「来ることと、去ることはない」、それについて、生ずることはなく、滅することはなく何かについて、「生ずることはなく、滅することはなくもの」⁽³⁴⁾、それは知ることはない。「知ること（shes pa）」それとおりに「知らないこと（mi shes pa）」も同様である。それはなぜかといえば、出離する、あるいは出離しないどんな法も「知らない（mi shes pa）」から。いつか、出離する、あるいは出離しない、どんな法も「知らない（mi shes pa）」、そのとき智慧（ye shes）を具えた、という。」と。

それから世尊に対して、アジャータシャトル王はこのように申し上げるー

「世尊よ、どれほどか如来・応供・正等覚者（仏）が良くお説きになったことは、驚異です。世尊よ、もしも私において、まさにこの機会に、死の時になった〔なら〕、私は結生相続しないでしょう⁽³⁵⁾。」と。

グリドラクータ（靈鷲山）での世尊

それから世尊はアジャータシャトル王に、法話を正しく教示し、（D.Ga.254 a）正しく受持させ、正しく讃励⁽³⁶⁾し、正しく最上に歓喜させてから、座からお立ちになった。去ってから午後（phyi dro）の時、さらに法施に集合するようになされた。そ

れから世尊は午後の食（*zas phyis*）を受けることを断った。鉢と、法衣を置いてから、御足を洗い、〔禅定において心を〕内に安住させる（*nang du yang dag 'jog pa*）ために住房に来られ、それから世尊は午後の時、内への安住から立って、〔ラージャグリハにある〕山の王〔である〕グリドラクター（靈鷲山）のその場所に行き、着かれてから、すなわち、法を正しく（*P.Wi.289 a*）教示するために、世尊は準備された座に坐られた。具寿シャーリプトラと、他の偉大な声聞たちも同様に、内への安住から立って、山の王〔である〕グリドラクターの場所と、世尊のその場所に行き、着いてから、世尊に対して頭で礼拝し、三回〔右まわりに〕圍繞して、一方〔の坐〕に坐った。マンジュシュリー童子（文殊 *'Jam dpal gzhon nur gyur pa*）も、内への安住から立って、あらゆる四万二千の天子すべても、大乘に正しく入った者のみによって囲まれて、面前に並び、共に世尊のその場所に行き、着いてから、世尊の御足に頭で礼拝し、一方〔の坐〕に坐った。マイトレーヤ菩薩摩訶薩も、千ほどの菩薩によって囲まれて、面前に並び、共に世尊のその場所に行き、着いてから、世尊の御足に頭で礼拝し、一方〔の坐〕に坐った。獅子勇猛雷音（*Seng ge'i rtsal kyis mngon par bsgrags pa'i sgra*）菩薩摩訶薩も、五百ほどの菩薩によって囲まれて、面前に並び、共に世尊のその場所に行き、着いてから、世尊の御足に頭で礼拝し、一方〔の坐〕に坐った。（*D.Ga.254 b*）アジャータシャトル王も、四支の軍隊⁽³⁷⁾によって囲まれて、面前に並び、共に山の王〔である〕グリドラクターの場所、（*P.Wi.289 b*）世尊のその場所に行き、着いてから、世尊に対して頭で礼拝し、一方〔の坐〕に坐った。それから仏の威力により、具寿シャーリプトラは座から立って、上衣を一方の肩にかけて、右膝の膝頭を地に着けた。世尊の〔居られる〕その場所の傍らで合掌して、拜んで、世尊に対して、このように申し上げる――

シャーリプトラの質問

「世尊よ、ラージャグリハの大都城の市内において、摧過咎菩薩摩訶薩が、この菩薩摩訶薩たちの仏国土の功德莊嚴に関して質問しました〔が、〕そ〔れへ〕の回答を世尊が要点ほどを宣べた⁽³⁸⁾時、世尊よ、それもまた、菩薩摩訶薩たちの仏国土の功德莊嚴が円満に成就することそれに関して、どのように行ずる菩薩摩訶薩は、無上の正等覚から退転しないし、一切智性を了解するし、魔の諸軍を破るし、他の外道たちを征伏するであろうし、煩惱に圧倒されないであろうし、仏国土の功德莊嚴を浄化することになり、誓願を円満に完成するであろうし、智慧を損なわないであろうし、仏地に入るであろうし、声聞と独覚との地を全く断つであろうし、（*D.Ga.255 a*）六波

羅蜜を行ずるであろうし、一切智性を獲得する。すなわち菩薩でありながら法輪を転ずるであろうし⁽³⁹⁾、無量無数の衆生の利益をなすであろう⁽⁴⁰⁾。そのように法を良く教示してください。世尊よ、この眷属には、良家の息子と (P.Wi.290 a) 良家の娘〔である、〕菩提を希求し集まっている者たちは、世尊から法を直接に聞き、歡喜し、広大な最上の歡喜を得るでしょう。彼ら、歡喜と最上の歡喜とを得てから、聞いたとおりに勤修するであろう者たちがいます。」と。

世尊の神変

それから世尊はこのようにお考えになった—

「このような法を教示しようとするにあたって、こうした眷属は美しくないので ('khor 'di lta bu ni mi mdzes kyis)、私はどのような造作されるべき神変を造作したことによって、十方〔世間〕全てにおける各々の方角にも、多くの十万コーティ・ナユタの光明を放った。各々の光明も、多くの十万コーティ・ナユタの仏国土を照らし、遍満した。それら仏国土では太陽と月の光も輝かず、それら〔太陽と月の光〕をそれら〔神変〕の光明が圧倒してから、再び〔太陽と月の光は〕眼根に輝くことにならず、諸天の光も顕わでなく、龍とヤクシャと、宝珠と、雷と、火と、星座と、他の衆生の光も顕わでなく、十方の無量無辺の世界の鉄围山と、大鉄围山と、ムチリンダ山(林陀山)と、大ムチリンダ山と、山の王〔である〕スメール山と、それ以外の山の王〔である〕黒山と、それ以外の黒山と、壁 (rtsig pa) と、樹と、森林、それら全てを、それら〔神変の〕光明は貫徹して照らすであろう、そのような造作されるべき神変を、造作しよう。」とお考えになった。

それから、世尊はそのような光明を放って、明瞭なお言葉 (gsung bsal) の (D.Ga.255 b) 音声 (sgra) を出された (P.mjed pa, D.mdzad pa)。その明瞭なお言葉の音声により (des)、十方全ての無量無辺の世界の音声でもって理解された。

東方に向かった普光世界の仏菩薩— 法上菩薩

さらにその時に、東方に〔向かい〕、この仏国土から、八十四のガンジス河の砂〔の数〕ほどの仏国土を過ぎ去った〔ところ〕に、(P.Wi.290 b)「普光 (Kun nas 'ong)⁽⁴¹⁾という世界〔がある〕。そこには、如来・応供・正等覚者〔である〕吉祥積王 (dPal brtsegs rgyal po)⁽⁴²⁾という者が、現在も居られる。〔すなわち〕生きて、住し、法をも教示する (Itar yang bzhugs te / 'tsho zhing gzhes la chos kyang ston to)⁽⁴³⁾。その仏国土には、声聞と独覚たちの名前〔すら〕も知られていない。その仏国土は菩

薩摩訶薩のみによって満たされている。その仏国土における各々の菩薩衆にも、一万
 コーティの不退転の菩薩摩訶薩がいる。その仏国土には法上 (Chos 'phags)⁽⁴⁴⁾ 菩薩摩
 訶薩という者が住している。なぜその菩薩は「法上」というのか、といえ、その菩
 薩は、かの世尊〔である〕吉祥積王如来を菩薩の僧伽⁽⁴⁵⁾によって囲まれて、〔吉祥積
 王如来が〕「法 (chos)」を教示する御前^{おんまえ}において、七ターラ樹ほど〔の高さ〕の空中
 (bar snang)に「上昇した ('phags so)」⁽⁴⁶⁾〔からである〕。身体を隠して⁽⁴⁷⁾、この菩
 薩蔵⁽⁴⁸⁾という法門〔すなわち〕金剛句のダラニ (rdo rje'i tshig gi gzungs)の法を
 教示する。それから、それら菩薩はこのように思った—

「これら法のすべては音声 (sgra) ほどである。それはなぜかといえ、このよう
 にこの良家の子の身体は現れないが、講釈も知られるし、音声も発する。色 (姿)⁽⁴⁹⁾
 が円満に成就しているのも現れない。音のとおり、色 (姿) もそのとおりである。
 色 (姿) のとおりに、一切法はそのとおりである。」と。

忍の獲得

そのように知ること (rab tu shes pa) によって無量の菩薩たちは忍を得た。ゆえ
 に、かの菩薩は「法上」という⁽⁵⁰⁾。かの法上菩薩は、その〔仏の〕大いなる光明
 (現れ)をも見た。(D.Ga.256 a) 明瞭なお言葉の声も聞いた。見て聞いてから、かの
 世尊〔である〕吉祥積王如来のその場所に行き、到着して、(P.Wi.291 a) 世尊の御足
 に頭でもって礼拝し、一方に坐った。一方に坐ってからさらに、法上菩薩摩訶薩は、
 かの世尊に対して、このように申し上げる—

「世尊よ、この大いなる光明 (現れ) が世間に生じたし、明瞭なお言葉の大音声も
 あります— この因は何ですか。縁は何ですか。世尊よ、このような光明 (現れ)
 はかつて見たことがありません。」とこのように申し上げた。

西方に向かった娑婆世界の釈迦牟尼 (十方世界との交流)

世尊・如来・応供・正等覚者〔である〕吉祥積王は、法上菩薩摩訶薩にこう宣べた
 —

「良家の子よ、この仏国土から西方に〔向かい〕、八十四のガンジス河の砂〔の数〕
 ほどの〔仏国土を〕過ぎ去った〔ところ〕に、「娑婆 (Mi mjed)」⁽⁵¹⁾という世界があ
 る。そこには、如来・応供・正等覚者〔である〕釈迦牟尼 (Shā kya thub pa)⁽⁵²⁾とい
 う者が、現在も居られる。〔すなわち〕生きて、住している。その如来は、無量無数
 の十万コーティ・ナユタのこの十方の世界から、菩薩を集める。そしてすなわち、法

を宣説すべきために、一切の毛孔からこれらの光明を放ち、明瞭なお言葉の音声を発した。」と。

それからかの世尊・如来〔である〕吉祥積王に、法上菩薩はこのように申し上げる

「世尊よ、私は、かの娑婆世界におけるかの世尊・如来・応供・正等覚者〔である〕釈迦牟尼を見て、礼拝し、奉事し、(P.Wi.291 b) (D.Ga.256 b) 彼ら菩薩の僧伽をも見て、その法をも聞きに行きます⁽⁵³⁾。」と。

かの世尊は宣べた－

「良家の子よ、あなたはその時に至ったと知るならば行きなさい。」と。

一切装飾莊嚴という菩薩の三昧

それから法上菩薩摩訶薩は、六千三百万 (stong phrag drug khri sum stong) によって囲まれて、前方に進んで、譬えば大力の人が腕を縮めてから伸ばし、伸ばしてから縮めたほどにより、まさにその刹那、瞬間、瞬時こそにその仏国土から〔その現れを〕没して、この娑婆世界に住する。それから法上菩薩は、その時、一切装飾莊嚴 (rgyan thams cad kyis brgyan pa) という菩薩の三昧に入定した。法上菩薩摩訶薩がその三昧に入定するやいなや、それからまさにその刹那こそに、この三千大千世界をたくさんの華の集まりが膝の高さほどに満たし、十万の楽器の音も生じた。この世界は揚げられた傘と、^{のほり}幢と、高く上がった^{はた}幡 (ba dan bsgreng) によっても、良く莊嚴された。最高の香によっても正しく薫じられた。他化自在天の享受と違いがなくなった。それから、法上菩薩摩訶薩はそのような種類の神力の神変を示してから、それら菩薩摩訶薩と共に、世尊〔である〕釈迦牟尼の〔居られる〕場所に行った。着いてから世尊の御足に頭でもって礼拝した。世尊を三回〔右まわりに〕圍繞⁽⁵⁴⁾してから、誓願のとおりが生じた諸々の蓮華〔の座〕に、眷属を伴って、一方に (P.Wi.292 a) 坐った。

南方に向かった離塵世界の仏菩薩

またその時、南方に〔向かい〕、この仏国土から、九十六のコーティ・ナユタのガンジス河の砂〔の数〕ほどの〔無数の〕仏国土を過ぎ去った〔ところ〕に、「離塵 (rDul med pa)」⁽⁵⁵⁾という世界〔がある〕。そこに、如来・応供・正等覚者〔である〕(D.Ga.257 a) 獅子勇猛奮迅 (Seng ge'i rtsal gyis bsgyings pa)⁽⁵⁶⁾という者が、現在も居られる。〔すなわち〕生きて、住し、無量の菩薩の僧伽によって囲まれ、法を教示している。

その仏国土に、声聞と独覚たちは無い。またその仏国土には、宝手（Lag na rin poche）⁽⁵⁷⁾菩薩摩訶薩というものが住している。なぜその菩薩は「宝手」というのか、
 といえ、また良家の子よ、彼はいつか（nam）他の仏国土において、有情たちに法を教示しようと望む、その時、右手を伸ばしてから、欲するほどの仏国土、それほどの仏国土を手によって撫でて（byugs nas）、その手から仏宝の声が生ずる。法宝の声と、僧宝の声とが生ずる。布施と、戒と、忍と、精進と、禪定と、智慧との宝の声が生ずる。慈と、悲と、喜と、捨との宝の声が生ずる。それらとさらに外も、種々の百千コーティ・ナユタの法宝の声が生ずる。ゆえに、良家の子よ、彼は「宝手」という。宝手菩薩はその〔仏の〕大なる光明（顕れ）をも見た。その明瞭なお言葉の声も聞いた。見て聞いてから、さらに、かの世尊・如来〔である〕獅子勇猛奮迅のその場所に行き、到着して、世尊の御足に頭でもって礼拝し、一方〔の座〕に坐った。一方〔の座〕に坐ってから、宝手菩薩摩訶薩は、かの世尊・（P.Wi.292 b）如来〔である〕獅子勇猛奮迅に、このように申し上げる――

「世尊よ、この大なる光明（顕れ）は世間に生じたし、明瞭なお言葉の（D.Ga.257 b）大音声もある――これの因は何ですか。縁は何ですか。」と。

北方に向かった娑婆世界の釈迦牟尼

世尊は宣べた。――

「良家の子よ、北方に〔向かい〕、この仏国土から、九十六コーティ・ナユタのガンジス河の砂〔の数〕ほどの〔無数の〕仏国土を過ぎ去った〔ところ〕に、「娑婆（Mimjed）」という世界がある。そこに、如来・応供・正等覚者〔である〕釈迦牟尼という者が、現在も居られる。〔すなわち〕生きて、住し、法をも説く。その如来は、この無量無数の十万コーティ・ナユタの十方の世界から、菩薩を集める。そしてすなわち、妙法を宣説するために、一切の毛孔からこれらの光を放ち、明瞭なお言葉の声を発した。また、良家の子よ、かの釈迦牟尼如来は、仏国土の功德莊嚴という法門を説明するよう望まれる。そこの無量の菩薩たちは仏国土の功德莊嚴を摂受するであろう。」と。

それからかの世尊〔である〕獅子勇猛奮迅に、宝手菩薩摩訶薩はこのように申し上げる――

「世尊よ、かの娑婆世界における、かの世尊・如来・応供・正等覚者〔である〕釈迦牟尼を見て、礼拝し、奉事し、かの菩薩の集会をも見て、その説法をも聞きに行きます。」と。

釈迦牟尼の誓願

かの世尊は宣べた－

「良家の子よ、あなたはそこに行って、何らかまわさない。それはなぜかといえば、貪と瞋と痴とにより、覆われた衆生と（P.Wi.293 a）出会うから、その世界は苦である。」とこのように宣べた。（D.Ga.258 a）

宝手菩薩摩訶薩は、かの世尊・如来〔である〕獅子勇猛奮迅にこのように申し上げる－

「かの世尊・如来・応供・正等覺者〔である〕釈迦牟尼は、いかなる義（don gyi dbang）を御覽になれば、世尊よ、完全に清浄な、他の仏の国土もあり⁽⁵⁸⁾ながら、それほどに悪しき仏国土を摂受するのですか。」と。

かの世尊は宣べた－

「良家の子よ、かの世尊・如来・応供・正等覺者は、『私はどうあっても悪しき衆生の中で、無上の正等覺を現等正覺し、法を教示しよう』と長い間に誓願を立てた⁽⁵⁹⁾。良家の子よ、如来〔である〕釈迦牟尼はそのように大悲を具えている。」と。

それから、かの世尊・如来〔である〕獅子勇猛奮迅に宝手菩薩摩訶薩は、このように申し上げる－

「世尊よ、かの娑婆世界における、かの世尊・如来〔である〕釈迦牟尼を見て、礼拝し、奉事するために行きます。それは何のためかといえば、このように大悲を生じさせて、それほどに悪しき仏国土を摂受したことは、かの世尊・如来〔である〕釈迦牟尼は、なし難いことをなさった。このような如来・応供・正等覺者は生じ難いです。彼を見ることも得難いです。」と。

かの世尊は宣べた－

「良家の子よ、あなたはその時に到ったと知るならば、行きなさい。良家の子よ、あなたは、（P.Wi.293 b）その仏国土において謹んでいなさい。さもないと〔自分が〕傷ついたことになる⁽⁶⁰⁾。（D.Ga.258 b）それはなぜかといえば、その仏国土に生まれた菩薩、彼らは親近し難い。そこの他の衆生、彼らも粗暴であり、瞋恚の者たちである。」とこのように宣べた。

すると、宝手菩薩摩訶薩は、かの世尊・如来〔である〕獅子勇猛奮迅にこのように申し上げる－

「世尊よ、およそ貪愛し、瞋恚するであろう者は、その仏国土では〔自分が〕傷ついたことになるだろうが、世尊よ、私には貪愛することも無いし、瞋恚することも無いのです。それなら私は一体どうして〔自分が〕傷ついたことになるのか⁽⁶¹⁾。世尊

よ、私を一切衆生が後の辺際（未来のはて）の劫にまで、罵り叱責し、脅し殴打して、瓦礫と刀をもって打っても、忍ぶことを喜びます。どの衆生に対しても、害する心を起こしません。」と。

それからかの世尊・如来〔である〕獅子勇猛奮迅は、自身の菩薩の眷属に宣べた—「良家の子たちよ、あなた〔たちの〕うち、宝手菩薩のように、このような忍を正しく摂受することを喜び者は、この良家の子（宝手菩薩）と一緒にかの娑婆世界に行きなさい。」と。

宝手菩薩の活動

かの世尊が、その句の言葉をお説きになるやいなや、それから、かの菩薩の眷属の中から、九万二千の菩薩が、声を一つに〔合わせて〕、「世尊よ、私たちも宝手菩薩のように、このような忍を正しく摂受することを喜びます。かの娑婆世界に行きます。」と申し上げた。それから宝手菩薩摩訶薩は、九万二千の菩薩によって囲まれて、面前に来た。共に一発心〔ほどの短時間〕によって、かの仏国土から没して、(P.Wi.294 a) この〔釈迦牟尼の〕仏国土に住した。それから、宝手菩薩摩訶薩は、(D.Ga.259 a) このように思う—

「私はどのような神力によって、かの世尊〔である〕釈迦牟尼の方に行き、無量の衆生をどのように安楽にしようか。」と。

それから宝手菩薩摩訶薩は、その時、如実に三千大千世界を右手で覆って、その手から、食べもの (bza' ba) が欲しい者たちには食べものが生じ、飲みもの (btung pa) が欲しい者たちには飲みもの、同様に乗り物 (bzhon pa) と、衣服と、金と、銀と、毘瑠璃と、真珠と、螺貝と、水晶と、珊瑚〔といった〕、おそよ欲しいものすべてがその〔彼〕から生じた。法を希求し、法が欲しい彼ら衆生も、その手から法を聞いた。そしてそこにおいて、無量の衆生たちも法を現観した。そして種々の種類の病にかかり、苦しんだ彼らみなも、最高の安楽を具えた〔—以上、〕そのような造作されるべき神変を造作した。それから宝手菩薩摩訶薩は、この、そのような種類の神力の神変を示現して、彼ら菩薩と一緒に、世尊・如来〔である〕釈迦牟尼のその場所に行き、着いて、世尊の御足に頭でもって礼拝した。世尊に対して三回〔右まわりに〕圍繞してから、誓願のとおり生じたそれらの蓮華〔の座〕に⁽⁶²⁾、眷属を伴って、一方〔の座〕に坐った。

西方に向かった宝蔵世界の仏菩薩

またその時、西方に〔向かい〕、この仏国土から (P.Wi.294 b) 九十二の十万コーティ・ナユタのガンジス河の砂〔の数〕ほどの〔無数の〕仏国土を過ぎ去った〔ところ〕に、「宝蔵 (Nor bu'i snying)」⁽⁶³⁾という世界〔がある。そこ〕には、如来〔である〕宝積王 (Nor bu brtsegs rgyal po)⁽⁶⁴⁾という者が、現在も居られる。〔すなわち〕生きて、住し、法をも教示する。その如来のその仏国土は賢れた毘瑠璃だけから成就している。(D.Ga.259 b) その仏国土には、声聞と独覚との乗の施設はない⁽⁶⁵⁾。その仏国土は菩薩のみが充ちている。またその仏国土では菩薩たちが行っても、来ても、立っても、坐っても、立ち上がっても、歩いても、彼らはその毘瑠璃の大地から、かの世尊・如来〔である〕宝積王を見る。すなわち譬えば、磨かれた円満な鏡面 (円鏡) に〔円満な〕顔面が現れる、同様に、彼ら菩薩がその瑠璃の大地から、かの如来を見る⁽⁶⁶⁾。見てから一切の法を問う。かの如来は、また彼らに授記する。彼らは、また法を聞いて、忍を得た。すなわち、かの世尊のかつての誓願 (本願 sngon gyi smon lam) によって、その世尊の眉間の毛の中央にも、大きな宝玉が成就した。その宝玉の光がそれら一切の仏国土を照らして、その仏国土における花が閉じたことと、花が開いたことから、昼夜を数えること以外に、太陽と月として顕現もない。昼夜として顕現もない。またかの宝積王如来の仏国土において、殊勝願慧 (sMon lam khyad par blo gros)⁽⁶⁷⁾菩薩摩訶薩というものが住していた。(P.Wi.295 a) 殊勝願慧菩薩摩訶薩は、その大いなる光明 (顕れ) をも見た。その明瞭なお言葉の音声も聞いた。見て聞いてから、かの世尊・如来〔である〕吉祥積王のその場所に行き、着いて、世尊の御足に頭でもって礼拝し、一方〔の座〕に坐った。一方に坐ってからさらに、(D.Ga.260 a) 殊勝願慧菩薩摩訶薩は、かの世尊〔である〕吉祥積王如来にこのように申し上げる－

「世尊よ、この大光明が世間に生じ、明瞭なお言葉の大音声もある。これの因は何ですか。縁は何ですか。」〔と〕。

東方に向かった娑婆世界の釈迦牟尼

かの世尊は宣べた－

「良家の子よ、東方に〔向かい〕、この仏国土から、九十二の十万コーティ・ナユタのガンジス河の砂〔の数〕ほど〔の無数の〕仏国土を過ぎ去ったところに、「娑婆」という世界がある。そこには、如来・応供・正等覚者〔である〕釈迦牟尼という者が、現在も居られる。〔すなわち〕生きて、住し、法をも教示する。その如来は、十

方の無量無数のコーティ・ナユタの世界から、菩薩を集める。そしてすなわち、法を宣説すべきために、一切の毛孔からこれらの光明を放ち、明瞭なお言葉の音声を発した。」と。

このように宣べられた。すると殊勝願慧菩薩は、その世尊に対して、こう申し上げる―

「世尊よ、私はかの娑婆世界における、かの世尊・如来・応供・正等覚・釈迦牟尼を見て、礼拝し、奉事し、菩薩のその集会をも見て、その法の教示をも聞きに行きます。」と。

かの世尊は宣べた―

「良家の子よ、あなたはその時に至ったと知ったならば行きなさい。(P.Wi.295 b)」と。

殊勝願慧菩薩

それから殊勝願慧菩薩は、四十二の十万コーティ・ナユタの菩薩により囲まれて、面前に来て、一緒に一発心することにより、その仏国土から没して、この娑婆世界に住する。それから殊勝願慧菩薩はこのように思う―

「私はどのような神力の神変によって、かの世尊・(D.Ga.260 b) 如来・応供・正等覚者〔である〕釈迦牟尼の方面に行くのだろうか。」と。

それから殊勝願慧菩薩は、その時、どのようにこの三千大千世界において、有情地獄と、畜生の生処と、閻魔の世界に生まれた衆生たち、彼ら全てが最高の安楽を具え、有情地獄の衆生たちの有情地獄⁽⁶⁸⁾の火も鎮静し、衆生〔すなわち〕飢えと渴きによって悩まされた餓鬼と、畜生の生処に至った彼ら衆生と、閻魔の世界の彼らすべてが飢えと渴きを離れ、最高の安楽を具えたのか。すなわち譬えば、比丘の〔色界の〕第三静慮に入定した安楽のようである⁽⁶⁹⁾。まさにその刹那こそ、彼ら衆生がこのような種類の安楽が生じて、まさにその刹那こそ、どんな衆生も貪、あるいは瞋、あるいは痴、あるいは憤怒、あるいは慢、あるいは覆、あるいは悩、あるいは嫉、あるいは慳、あるいは諂、あるいは恨、あるいは害心による逼迫はなく、すべての趣に生じたあらゆる衆生すべても、まさにその刹那こそ、慈の心と益の心とを具え、〔長い輪廻において〕互いを父母だと想うことになった⁽⁷⁰⁾、そのような造作すべき神変を造作した。〔すなわち〕そのような三昧に入定した。それから (P.Wi.296 a) 殊勝願慧菩薩は、このような種類のこの神力の神変を示現して、彼ら菩薩摩訶薩と一緒に、世尊・如来・応供・正等覚者〔である〕釈迦牟尼のその場所に行き、着いて、

世尊の御足に頭でもって礼拝した。世尊に対して三回〔右まわりに〕圍繞してから、誓願どおりに生じたそれら蓮華に、眷属を具えて、一方〔の座〕に坐った。

訳註

- (1) Cf. Cecil Bendall, *Śikṣāsamuccaya*, 名著普及会, 1977, pp.13-14
- (2) 唐慧琳撰『一切経音義』（『大正蔵』54. No.2128, p.390 cff.）は、「大宝積経第五十八卷（文殊授記会第十五三卷経）」（唐実叉難陀訳）の十九の難語（例、摧過咎）について語釈する。
- (3) 今回の当該箇所からは外れている。その内容的な紹介は『印度学仏教学研究』62-1（2013）に、「文殊の誓願行と浄土經典 - 〈文殊師利仏土厳浄経〉所説の「菩薩の学処」「大波濤誓願」「往生説」-」として掲載した。
- (4) 漢訳の対応箇所は以下のとおりである。
 - ・西晋竺法護訳『文殊師利仏土厳浄経』（『大正蔵』11, No.318, pp.890 c-893 a）
竺法護訳は他の諸本と比較した場合、「十方世界との交流」の記述が大変簡略である。
 - ・唐実叉難陀訳『大宝積経』『文殊師利授記会』（『大正蔵』11, No.310-15, pp.336 c-340 a 20）
 - ・唐不空訳『大聖文殊師利菩薩仏利功德莊嚴経』（『大正蔵』11, No.319, pp.902 b-906 a 22）
- (5) チベット語音写表記は, *Ārya Ma ndzu shri bud dha kshe tra gu ṇa byu ha na* である。
- (6) 普賢菩薩が登場していない時代の反映か。最古の漢訳である竺法護訳にも出ない。
- (7) 以下の固有名詞は不空訳を優先的に出し、対応がなければ実叉難陀訳を利用した。
- (8) Tib. phrag rtsub = Skt.kharaskhandha (asura-nāma) Cf. Lokesh Chandra, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, p.1576 b
- (9) 都市自体には住さないと考えられるので、こう和訳した。
- (10) 六波羅蜜を語りつつ、主体に言及しない表現になっている。無我説に通ずるか。
- (11) 三種（声聞・独覚・菩薩）の菩提心のうち、最高の菩薩の菩提心を指す。
- (12) 世界創造神の自在天、あるいは他化自在天のことか。
- (13) 金、銀、瑠璃、玻璃（水晶）、硨磲、赤珠（珊瑚）、瑪瑙。あるいは転輪王七宝（金輪宝、白象宝、紺馬宝、神珠宝、王女宝、主藏宝、主兵宝）。
- (14) 現代ならば商社の社長、あるいは商隊長。
- (15) 政治体系に配慮してか実叉難陀訳、不空訳にはない。
- (16) 〈瑜伽論〉「菩薩地」威力品所説、五種威力第一の「神通威力」中の「能化通」には十八種類の神変が詳説される。三昧自在を得て堪能な心を持つ仏菩薩は、大地の震動、光の遍照、種々の境遇の示現、瓦礫を宝にする、自由自在な往来、縮小拡大の自在、自身の身体にすべてを取り込むこと、所化に応じた身体の示現、自身の姿の顕隠、衆生の自在に動かす、衆生の弁舌を巧みにする、安樂の施与、救済性を具えた光明の放射を行うという。Cf. 梶山雄一監修『さとりの遍歴 - 華嚴経入法界品 -』上下（中央公論社、1994）、同「神変」（『佛教学総合研究所紀要』2, 1995）
- (17) 六種震動、すなわち動、起、涌、覺／擊、震、吼。
- (18) 暫定的に実叉難陀、不空訳を使用した。竺法護訳：棄惡、実叉難陀訳、不空訳：摧過咎
- (19) 首都の大都城の内のこと。
- (20) 例えば〈ウダーナヴァルガ〉cp.10, vs.14-15 を参照。
- (21) Cf. 平川彰「浄土思想の成立」（『講座大乘仏教』5「浄土思想」、春秋社、1989）

- 22) 本経の特徴の一つである降下的な視点。
- 23) 五蘊の証得→現等覚→仏国土の浄化→仏国土の摂受, という順序
- 24) 一切法を蘊, 界, 処とする記述は, 初期仏典以来のものである。それに有為と無為の区別を加えて, 七十五法に分析するのは説一切有部の法体系であり, ここではそれを批判的に受容していると思われる。
- 25) 一切法を五蘊と理解する。
- 26) 經典註釈書の形式と類似する。
- 27) 諸漢訳には対応文なし。諸仏は, 衆生が悟るなど, 何か因縁がある時に微笑むが, それ以外の時に微笑しない, そういうルール, 決まりがある, という意味。
- 28) 授記に関する表現。
- 29) 三衣一鉢は出家修行者に許可された携帯品。僧伽梨 (正装衣), 鬱多羅僧 (上衣), 安陀会 (肌着)。
- 30) 意識すると「寂靜であり, 調伏された自在者」, あるいは「静かで穏やかな自在者」。竺法護訳: 寂化音, 実又難陀訳, 不空訳: 寂靜調伏音声
- 31) インドの食事作法。日本語でいう「箸を置く」という意味。供養を自ら行うことについては(菩薩地)に出典がある。Cf. ツルティム・ケサン, 藤仲孝司『ソノカバ菩提道次第大論の研究』(文栄堂, 2005, pp.202-203)
- 32) 両漢訳が示しているが(小座, 卑床座), 高座に居る者に対して説法しないことは, 作法の一つ。
- 33) 苦諦の遍知ということにかかるのか。
- 34) Cf. 三枝充恵『中論 - 縁起・空・中の思想 上』(第三文明社, 1992, p.87 註1), 同「龍樹の帰敬偈について - 帰敬偈成立史考」(『龍樹・親鸞ノート』法蔵館, 1983)
- 35) 父王を殺したので, 一般的な業果からすると, 無間地獄が必定のアジャータシャトル王であるが, 今なら, あたかも阿羅漢のように後有を受けないだろうとあって, 罪業が空観において浄化されたことを含意する。安息の発言である。
- 36) D. gzung bstod, P. gzengs stod
- 37) 転輪聖王の四種の軍隊。馬兵, 象兵, 車兵, 歩兵。
- 38) 要点を述べて細釈するという構造。前を承けた表現。
- 39) 三阿僧祇劫を経ないと法輪を転じることができないことを前提としつつも, 否定している。大乘菩薩のありよう。発心即便成正等覚。
- 40) 文殊菩薩のありよう。華嚴思想では普賢行に相当する。
- 41) 実又難陀訳: 普光明, 不空訳: 普遍
- 42) 実又難陀訳: 集吉祥王, 不空訳: 吉祥積王
- 43) 固有名詞(仏名)を除くと, 〈阿弥陀経〉の表現と全同である。浄土經典の定型句である。蔵訳〈阿弥陀経〉(Cf. 『浄全』23, p.342) Tib. de na de bzhi gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas Tshe dpag med ces bya ba bzhugs te 'tsho zhing gzhes la chos kyang ston to
- 44) 実又難陀訳: 法上, 不空訳: 法勇 〈般若経〉末尾に登場する菩薩。
- 45) 「ガナ」でないので, 出家者の菩薩とも考えられる。
- 46) シャーンティデーヴァの伝承に空中浮遊の話が出る。
- 47) 直訳では「現れない」。空思想, すなわち現象世界での「不現」。ある意味で「snang ba

mtha' yas (無辺光)」の根源としての「mi snang ba mtha' yas (不顕現)」かもしれない。ゆえに直後に「忍を得た」云々というのであろう。「大光明 (大顕現)」を見たともいうのであろう。

- (48) ここでの「菩薩藏」は大乘経を意味する、一般名詞というべきものか。
- (49) 五蘊の普現。五蘊であるから、直後に「一切法」というのであろう。
- (50) 一般的に空思想として、一切法は名のみ、仮設のみといわれる。
- (51) 実叉難陀訳：娑婆，不空訳：娑訶
- (52) 実叉難陀訳，不空訳：釈迦牟尼
- (53) 出家僧侶が往来について、師の許可を受けることの反映。
- (54) 「右繞」という言葉があるように、圍繞には「周囲を回る」と、聴衆のように「取り巻く」という二種類があるようだ。
- (55) 実叉難陀訳，不空訳：離塵
- (56) 実叉難陀訳，不空訳：獅子勇妙奮迅
- (57) 実叉難陀訳：宝掌，不空訳：宝手
- (58) yod pa より優美な言い方 (Cf. H.A. イェシュケ 『蔵英辞典』)。
- (59) 穢土成仏を願う点から、〈悲華経〉、あるいはそういった内容への言及か。後出の宝蔵世界や宝積王如来は関連を思わせる名前である。
- (60) P. D. smas par gyur ta re, 実叉難陀訳，不空訳：無自毀傷 Cf. 『大正蔵』5, No.220, p.10 b 24 に同文あり。チベット文の「ta re」は不明。
- (61) P. smras par gyur, D. smas par gyur, 実叉難陀訳，不空訳：無傷於我 デルゲ版の読みを採用した。
- (62) 一種の成仏を表現する形式か。
- (63) 実叉難陀訳：摩尼蔵，不空訳：宝蔵 このあたりの仏や国土の名は〈悲華経〉を想起させる。
- (64) 実叉難陀訳：摩尼積王，不空訳：宝積王
- (65) 大乘の施設のみがあるということ。極楽世界は三乗を包摂する立場を示している。
- (66) 〈智光明莊嚴経〉に同様の例が出る (Cf. 高崎直道 『如来蔵系経典』 (『大乘仏典』12, 中央公論社, 1992, p.292))。円満な鏡に円満な顔，これはマンダラのあり方か。
- (67) 実叉難陀訳：勝智願，不空訳：殊勝願慧
- (68) 一般的な地獄を指す表現。
- (69) 極楽世界とも共通する (Cf. 〈無量寿経〉梵本第38願)。実叉難陀訳：譬如比丘得諸禅定、不空訳：猶如苾芻入初静慮
- (70) 仏教的な視点からの同胞愛につながる言及。生きとし生きるものつながりを説く。初期仏教の影響を承けた『親友書簡』の例が有名である。Cf. ツルティム、藤仲 [2005] p.260, 386 註 35。

付記

藤仲孝司氏から多くの御教示を頂戴した。

主な参考文献

長井真琴訳

- ・『宝積部三』（「国訳一切経印度撰述部」，大東出版，1971（初版1930））pp.257-303）→唐実又難陀訳を扱う。

中村元，増谷文雄

- ・『大乘仏典抄（二）本願と浄土』（「仏教説話体系」29，鈴木出版，1985）

光川豊藝

- ・「文殊菩薩とその仏国土 -『文殊師利仏土厳浄経』を中心に-」（『仏教学研究』45・46 合併号，pp.1-32, 1990）

山本侍弘（弘史）

- ・「Ambararāja（文殊師利）の発菩提心偈 -中観儀礼の一側面-」（『論集』32, 2005）
（なかみかど けいきょう 共同研究 嘱託研究員／佛教大学 非常勤講師）

〈Summary〉

The Pure Land Sutra of *Mañjuśrī Bodhisattva* :
A Japanese Translation and Study of
Mañjuśrī-buddha-kṣetra-guṇa-vyūhālaṃkāra Part.1

NAKAMIKADO Keikyo

The present author have studied and translated *Mañjuśrī-buddha-kṣetra-guṇa-vyūhālaṃkāra* from Tibetan (Toh. No.59, P. No.760–15, T. Nos. 310–15, 318, 319), which is one of the famous Pure land Sutra, all in the *Mahāratnakūṭa* Collection, the great collection of the *Mahāyāna* Sutras. This Sutra has the explanatory character ; we can find the teachings of non-duality, and the Bodhisattva-Precepts, and our choosing the Buddha lands to birth etc. Above all things this Sutra is probably the origin of the tradition of the Surge practice (Tib.Rlabs chen spyod brgyud) in Indo-Tibetan *Mahāyāna* Buddhism. I attempt to show the magnificent world of *Mañjuśrī* Bodhisattva through translating and study of this Pure Land Sutra.

Key words : *Mañjuśrī-buddha-kṣetra-guṇa-vyūhālaṃkāra*, *Mañjuśrī* Bodhisattva, Pure Land Sutra